

受賞記念プログラムⅢ:文化賞2

リティー・パン(映画監督)

インタビュアー:岸野 令子(映画パブリシスト)

(パン) ここに来られたことをうれしく思います。奈良はシルクロードの終着点であり、いろいろな文化の混交が見られ、文化の力が感じられます。

(岸野) 監督の作品は自身の体験をベースにカンボジアの歴史が描かれています。その記憶を残し、伝えることはとても大変なことだと思います。このような映画づくりを永遠に続けられるのでしょうか。

(パン) 永遠の仕事ということではなく、必要な仕事であり、しなければならない仕事なのです。映画とは社会を映し出す一種の鏡であり、それを通じて将来に変化を起こすことは可能だということを伝えたいと考えています。

(岸野) パン監督は、カンボジアでポファナ視聴覚資産センターもつくられていますね。どのようなことをしておられるのでしょうか。

(パン) センターでは、カンボジアに関する映像、音声、写真等を集め、カンボジアの過去の記憶をアーカイブしています。国としてのアイデンティティをつくるには、過去の記憶にアクセスする必要があります。そのためにはツールが必要です。そこで、ジェノサイド以外のことも含めて自分たちの歴史を学べるようにしています。

(岸野) 若い映画人を育てるということもされているのですか。

(パン) 新しい世代が自己表現をする可能性を持つことは非常に重要です。映像と音声を通して、自分たちの感性を表現できるように指導しています。新しいアーティストたちを世界の変化に参加させる形で養成していくことは大切だと思います。

(岸野) 若い方々は、監督の作品を見て、どのような反応を示しますか。

(パン) 私の世代の人間はクメール・ルージュの悲劇をあまり話したがりません。と同時に、クメール・ルージュの時代が終わった後に生まれた人が増えています。彼らはこの時期を知りませんが、自分の国の歴史をよく知ることで、より成長することができると思います。映画は完全な知識を与える

ことはできないかもしれませんが、親世代がどういう経験をしたのか、少しは教えることができると考えています。

(岸野) 今回の「アジアコスモポリタン賞」を受賞されて、特別に感じられることはございますか。

(パン) 私はあまりメッセージを発信する人間ではありませんが、一人の市民として、自分自身の歴史を見つめ、皆さんとこういう形で一緒にできることを非常にうれしく思います。この賞で、文化がある位置を占めているのは重要なことです。皆さんの寛大な心に感謝し、明日の世界を少しでも良くしていければと思います。

(岸野) 近年は、日本でもアジア映画が多く公開されるようになり、パン監督の作品をはじめ、いろいろな作品を見る機会が増えると、互いの理解につながるのではないかと思います。監督は新しい作品を作られているようですが、どのようなものですか。

(パン) フランスによる植民地時代のインドシナに関する映画を撮り終えたところです。新しいプロジェクトとして、クメール・ルージュ政権時代にカンボジアに来たアメリカ人ジャーナリストに関するシナリオを書いています。カンボジアはまだ映画市場が小さく、欧米に配給しないといけないので、興味のある人がいればぜひ共同製作したいと思います。

私は日本映画から多くの影響を受けており、フランスのIDHEC(高等映画学院)にいたころ、たくさんの映画を見て、映画のスタイルや監督の考え方を学んでいきました。

(岸野) パン監督は、映像以外にも詩や本など、いろいろなことに興味をお持ちと聞いています。「消えた画」の原作ともいえる「消去」という本は、パン監督とクリストフ・バタイユというフランス人作家が共に書かれたものです。映画と本を両方見ると立体的にカンボジアの歴史が理解できると思いますので、ご紹介します。

